

平成二十一年度 入学試験問題

国語

第三回

【注意事項】

- 一、試験時間は五〇分です。(八時五〇分～九時四〇分)
- 一、問題は一ページから六ページまでです。
- 一、解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- 一、問いの中で、字数の指示がある場合は、句読点、記号等も字数に含みます。
- 一、解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ぼくは(ア)タビの先々で、山歩きをしたり、泳いだり、キャンプをしたり、カヌーを漕いだり、ピクニックをしたり、バードウォッチングをしたりして楽しんでる。野外でのこうした遊びを「アウトドア」という。最近をよく日本語として使われるので、きみも知っているかもしれないね。もともと「屋外」を意味するこの(イ)ありきたりの英語についてぼくが改めて考えるようになったのは、カナダのバンクーバーに住んでいた頃のことだ。

(シ)シュウイを海と山と森にかこまれた(カ)カナダ有数の都市バンクーバーは、他の大都会にはない不思議な魅力をもつ街だ。

休日には多くの人々が森や海に出かける。日の長い夏の数カ月、人々は毎日のように五時に仕事を終えてから、自転車や遠出したり、ピクニックをしたり、カヌーを漕いだり、山登りをしたり、ウィンドサーフィンをしたりして楽しむ。それは、日本人の多くが仕事の後にパチンコ屋に行ったり、買物に行ったり、飲み屋に行ったりすると同じような一種の習慣なのだろう。それにしても大都会に住む人々が何に愉しさをやしや安らぎを見出すかという「こころの習慣」が、日本とカナダではこうもちがうものなのか、とぼくは感心させられたものだ。

しかし、今、(ク)日本でも「アウトドア」ということばが定着し、アウトドアの遊びを楽しんだり、(コ)アウトドアジーな暮らしのスタイルを求める人々の数は増えつづけている。

そもそも「アウトドア」ということばが流行しているのは「先進国」と呼ばれる四十カ国ほどに限られている。つまり、このことばは人工の世界が自然界から切り離された結果、そこに住む人々が「生きづらさ」を感じていることを示しているのだ。そしてその生きづらさは、暮らしの中から何か重要なものが失われたことを意味しているだろう。

失われたもの、それは多分、遊びだ。しかも遊びの中でも、最も古くて、最も深く、人間にとっての根っこのような遊び。それは自然とたわむれるという遊び。

失われた自分の根っこを求めて、だからぼくたちは屋外へと出かけてゆくのではないか。つまり、アウトドアとは、自然とのたわむれをとり戻し、それで生活の中にポツカリと空いた穴を埋めようとする試みなのではないだろうか。

思えば、アウトドアとは「(4)不便」だ。重い荷物をもって、電気も水道もレンジもないところへ出かけて行ってキャンプをする。なんでわざわざそんな不便なことをするのだろうか？ もちろんそれが楽しいから。不便と楽しさがそこでは裏と表のようにピッタリとくっついている。《あ》

もちろん、不便がいつも楽しいとは限らない。でも、「(4)不便」というものがあることを知っておくのは大事なことだ。同じように、便利が必ずしもいいことだとは限らないということを、ぜひ知っておいたほうがいい。《い》

きみは便利ということばで何を思い出す？ 高速道路、携帯電話、コンビニ、自動販売機、全自動の炊飯器や風呂、コンピューター、インターネット……便利はまさに現代社会のキーワードだ。便利のすばらしさに疑いを差しはさむ人は変わり者といわれ、ひどい時には仲間はずれにされる。便利のためには相当の犠牲が伴っても人々は平気だ。自動車という便利のためには、毎年世界で八十八万人の人が交通事故で死んだり、もつとずつと多くの人が排気ガスによる空気汚染で病死したりすることもたいして気にならない。自動車を走らせるための石油をめぐって戦争が起きたり、道路をつくるために、キチョウな自然が壊されたりしても、平気である人がほとんどだ。どうやら、便利は一種の宗教らしい。人々はそれをあがめ、その前にひれ伏す。自動ドアをもつ家をつくる業者がいて、そういう家で子どもを育てたいと思う人がいる。便利だからだ。液晶を使つて「一年中楽しめる」人工ホテルを「ハツメイする」科学者がいて、それを買う人がいる。便利だからだ。日本には今、四万店をこえるコンビニ（便利を意味するコンビニエンスという英語から来た名前）と、五百五十五万台の自販機がいつ来るともしれない気まぐれな客を待つて、夜を明るくしてくれている。《う》

(5) 便利教という宗教のこわさについて、もうきみは十分知っていると思う。便利の裏側にはいつもいろんな不便がくっついてくるといふこと。公害も環境破壊も、便利教が引き起こした大きな不便だといふこと。ぼくたち人間は便利を手に入れるために、他人に迷惑をかけるばかりか、自分自身が生きていくための土台さえ平気で掘りくずしてきたのだといふこと。《え》

それだけではない。便利はぼくたち自身の能力を低下させたり、心やからだの健康に害を与えたり、生きる楽しさをとりあげたりすることもあるのだ。たとえば、車のせいでぼくたちの歩く能力は衰え、肥満などの健康

上の問題が増え、散歩の楽しさが減る、というふうな。

「楽」という漢字には大きくいってふたつの意味がある。ひとつは楽しいとか快樂とかの「楽」。もうひとつは便利とか「楽」を意味する「楽」。「楽しいこと」と「楽なこと」。このふたつを混同し、まるで同じことを意味しているかのように思いこむのは危険なことだ。少し考えればわかるように、楽なことが楽しいとは限らない。便利で楽なことがかえってぼくたちの楽しさをうばってしまうこともある。そして、楽しいことが、難しかったり、複雑だったり、面倒だったり、時間がかかったりすることはよくある。そればかりか、難しく、複雑で、面倒で、時間がかかるからこそ、楽しい、ということも珍しくない。

だから、ぼくたちはやっぱり、「楽しいこと」を「楽なこと」から区別しておいたほうがいい。★ファストな「楽」を手に入れるために、スローな楽しさや気持ちよさを犠牲にしないようにしましょう。そう考えるのがアウトドアという遊びだ。それは、楽で便利なことのかわりに不便で時間のかかるスローな楽しさをぼくたちに与えてくれる。

(辻信一『ゆっくりでいいんだよ』)

★アウトドアジー…アウトドア風の。

★ファストな……早い。

問一 — 線(1)「ありきたり」とありますが、この語の意味として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 単純な イ ありふれている
ウ やさしい エ 外国からきた

問二 — 線(2)「カナダ有数の都市バンクーバーは、他の大都会にはない不思議な魅力をもつ街だ。」とありますが、バンクーバーの人々と日本の都会の人々とはどのような違いがありますか。本文の表現を用いて六十文字以内で説明しなさい。

問三 — 線(3)「日本でも「アウトドア」ということばが定着し、アウトドアの遊びを楽しんだり、アウトドアジーな暮らしのスタイルを求める人々の数は増えつづけている。」とありますが、その理由の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人工の世界には苦痛があふれており、そこを出て自然の中でやすらかに生活したい人が多いから。

イ 「先進国」ではアウトドアが流行しており、日本でもそのまねをしたがっている人が多いから。

ウ 自然から切り離された人々は自然の中での遊びを失っているため、それを取り戻そうとするから。

エ 「生きづらさ」を感じている人々は、自然の中で遊ぶことで新たな自分を見つけようとするから。

問四 (4)に入る三字のことばを文中から抜き出しなさい。

問五 — 線(5)「便利教という宗教のこわさ」とありますが、どのようなことですか。本文の表現を用いて七十文字以内で説明しなさい。

問六 次の文は、本文中に入るものです。本文中の《あ》《え》の中から最もふさわしい箇所を一つ選び、記号で答えなさい。
《あ、なんとという便利な世の中だろう！》

問七 — 線(ア)《オ》のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現代社会では、高速道路や自動販売機など、便利なものが数多くあるが、そのために逆に害を被ったり失ったりしている面もある。不便さと楽しさがむすびついた遊びであるアウトドアを知ることには、便利さになれた現代を見直すきっかけとなる。

イ 現代社会では、便利さを追いかつてもとめるあまり、自然破壊が深刻なものになっていて、かえって人々を不幸にしている面がある。自然の中で不便な経験をするアウトドアは、環境保護の面を持ち、人々に自然の大切さを実感させる、意義深い遊びなのである。

ウ 現代社会では、人々は人工の世界に住んでいて、便利ではあるが、自然と切り離された生活を送っている。そのような人々と自然をむすびつけるアウトドアは、人々に子どもころのすなおな心を思い出させ、現在の心の穴をうめてくれるものなのである。

エ 現代社会では、「楽しいこと」と「楽なこと」との区別ができていないため、人々は「楽なこと」をもとめることが「楽しいこと」だと思っている。カナダで生まれたアウトドアは、「楽ではないこと」がかえって「楽しいこと」だと教えてくれるものである。

② 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

洪作は立ち上がった。子供たちの歓声が風に乗って流れて来ている。いつか子供たちは墓地の右手の方に移動していた。

見ると、子供たちは洪作を真似たのか、みんな着物を脱いで、★せんら全裸、★はん半裸の姿で墓石と墓石の間を駆け廻っている。がき大将たちは、時々木馬でも跳ぶように、★ていご手頃な墓石のところへ行くと、それを跳び越えている。あとに続く一年坊主や二年坊主は、それを跳び越えることができないので、墓石をよけて廻ったり、わざわざ骨を折って墓石をまたいだりしている。

よくしたもので、駆け廻っている子供たちを配してみると、墓地は墓地というより、遊園地といった方がびったりする。陽光は明るく降っているし、時々墓地の周辺の雑木の葉をゆるがせて、風が渡っている。

洪作はおぬい婆さんの墓詣りもすませたので、そろそろここを引き揚げたくなっていたが、子供たちがあまり楽しそうに遊び惚けているので、それを打ちきることが躊躇された。

そのうちに、(1)山の上の遊園地には異変が起きた。子供たちはいつせいに、
—うわあっ！

と、口々に叫びながら、洪作の方へ駆け来ると、一人が、

「西平のおじいさんが来たぞ」

と、息を弾ませながら言った。がき大将の一人が、

「逃げる！」

と叫んで、駆け出した。子供たちはそれに従った。墓石と墓石の間を着物を首に巻いたり、頭から被ったりして駆け行く。

—こらっ！

大人の怒鳴り声が風に乗って聞こえて来る。

子供たちが四方に散って行ったあとに、洪作も顔を見知っている西平部落のくめさんという老人が姿を現した。仕事着を着、首に手拭を巻き付けて、手には鈍を持っている。

「こら、がき共！」

くめさんは、もう一度子供たちの駆け行く方向にどなっておいて、それから洪作の方に近寄って来た。

「あなた、洪作さんじゃねえか」

くめさんは言った。

30

25

20

15

10

5

「そうです」

洪作が答えると、

(2)「争われねえもんだな。おふくろの七重さんにそっくりだ。よくまあ、これほど似たと思うほど似ている。——いつ来なすった？」

「二、三日前です」

「ほう、それで今日は、おぬい婆ちゃんの墓詣りか」

「そうです」

「そりゃ、いいことをした。気の強い、みんなに余りよく言われなかった婆ちゃだったけど、あんただけは、よく面倒みた。眼の中に入れても痛くないほど可愛かった。——そりゃ、いいことをした。婆ちゃんも、さぞ悦んでいることすら。今ごろ、墓の中で身を起こし、出べえか出まいか、とつおいつ思案してござらっしゃるべえ」

くめさんは言った。

「出るって、どこへ出るの」

「ここへさ。あなたの顔を見べえと思って、ここへ出て来る。ほかのどこに出ましように」

それから、

「それにしても、よく七重さんに似たもんだ。生き写しとはこのことだ」

くめさんはしげしげと洪作の顔を見守った。洪作は母親に似ていると言われたのは、これが初めてだった。これまでに誰からも、こんなことを言われたことはなかった。

「そんなに似ているかな」

「似ているどころじゃない。同じ顔をしとる」

くめさんは腰から煙管入れをとって、煙管に煙草を詰めた。そして一服吸ってから、急に思い出したように、

「あのがき共、悪戯しおって、——墓石を二つ倒しやがった！」

と言った。

「今日は何しに来たんです」

「うちの墓地に隣の墓地の木が被さっているんで、そいつを切つてやろうと思つてな」

それから、

「あなた、いま、どこに居なさる」

「沼津。でもじきに台北に行こうと思つてる」

60

55

50

45

40

35

「両親のところか」

「そう」

「やめときなさい。若い時は親許から離れている方がいい。修業中、親許に居る奴は、ろくな者にはならん」

くめさんは言った。考え方が少し違っている。

これまでいろいろな人から、親許に行つて家族と一緒に生活するようにと勧められて来たが、親許から離れているようにという忠告を受けたのは、こんどが初めてである。

「あなたは小さい時から親と離れている。とかく親と離れて育つと、変に僻んだ子ができるものだが、あなたはのびのびとしている。のびのびし過ぎるくらいのはのびのびしている。屈託がない。いつでも春みたいな顔をしている」

「厭になつちやうな」

洪作は苦笑した。春みたいな顔というのがどういふ顔であるか判らないが、いずれにしても、くめさんの言い方には安心して受け取りかねるものがあるのを感じられる。

「いや、わしは何も悪口を言っているんじゃない。人間には春の顔もあれば、秋の顔もある。冬の顔も、夏の顔もある。門ノ原のあなたの伯父貴などは冬の顔だ。何もあんなにしかめ面していなくてもよさそうなんだが、いつでもしかめ面をしている。あそこは似た者夫婦だ。夫婦揃つていつでもぶつぶつ文句ばかり垂れている。どこか豪いところもあるだろうが、あれじゃあ、なあ」

「くめさんの顔は？」

「わしか。わしは夏の顔だ。年中暇なしで、こうして働いている。毎日汗ばかし拭いて生きている。いっこうに芽は出ねえ。まあ、一生涯には縁がなさそうだが、これも生まれ付いたものだから仕方がねえ。だけれんど、文句は言わねえ。夏の顔で結構だ。

くめさんは煙管に煙草を詰めては、ひと口ふた口吸うと、すぐ掌の上でぼんぼんやっている。

(5) 「わが身の苦勞が苦勞にならねえ。苦勞が身につかぬえ。結構なことだ」

ここでもまた洪作は、くめさんの見方には誤りがあると思つた。全部が全部誤りとは言わないが、多少の誤りがあることだけは確かである。

「苦勞だつて、あるんだがな」

「そりゃ、人間だから、ちつとは苦勞だつてあるさ。だけれんど、あなたの場合は、その苦勞が身につかぬえ。苦勞が苦勞にならねえ。苦勞の方で根負けして引つ込んでしまふ」

その時、風に乗つて、子供たちの声が聞えて来た。

——洪チャ。洪作サン。

(6) 節をつけて、子供たちは洪作を呼んでいる。洪作は立ち上がつて、声の聞こえて来る方に視線を投げた。墓地の向こうの隅に子供たちの固まっているのが見えた。

——待ッテロヨ。

洪作も節をつけて怒鳴つておいて、またくめさんの横に腰を降ろした。くめさんとの話を打ち切る気持はなかった。くめさんと話しているのが楽しかった。

(井上靖『北の海』)

★全裸……………まるはだか。

★半裸……………からだの半分がはだかであること。

★遊び惚けて……………遊ぶことに夢中になって。

★とつおいつ……………あれこれ迷つて決心がつかないようす。

★煙管……………さざみ煙草を吸う用具。

★沼津……………静岡県の名。

★台北……………台湾の都市名。

★門ノ原……………静岡県の地名。

問一 ——線(1)「山の上の遊園地には異変が起きた。」とありますが、どのようなことですか。「遊園地」が何であるかを明らかにして四十字以内で説明しなさい。

問二 ——線(2)「争われねえもんだな。」とありますが、これはどのようなことについて言ったことばですか。本文の表現を用いて二十字以内で説明しなさい。

問二

——線(3)「婆(よば)ちゃんも、さぞ悦(よろこ)んでいることずら。」とありますが、この後も方言がでてきます。この方言の果たす効果の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 方言は人生の経験(けんけん)を積んだ老人(らうじん)が使うことによって、共通語以上に異常な印象(いんしょう)を与える効果。

イ 方言で話すことによって、老人(らうじん)の生活(せいかつ)する地域性(ちいきせい)が出て生々(なまなま)しい人物描写(にんぶつびやう)になる効果。

ウ 方言を使うことによって、日本語(にっぽんご)の表現(ひょうげん)が外来語(がいらいご)に頼(たよ)らずに、物語(ものご)に変化(へんか)をもたせる効果。

エ 方言で語ることで、老人(らうじん)の話(はなし)の内容(ないよう)が事実(じじつ)だけではなく人間(にんげん)の本質(ほんしつ)を述べる(のたま)ことができる効果。

問四

——線(4)「日蔭(ひかげ)にはいれば涼(すず)しいし、昼寝(ひるね)もできる」とありますが、この比喩(ひゆ)表現(ひょうげん)の説明(せ明明)として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号(きごう)で答えなさい。

ア これまで休(やす)みなしに働(はたら)いてきても出世(しゅっせ)することも金持(かねもち)になることもできなかつたが、季節(きせう)の変化(へんか)に合わせて、上手(うまい)に精神(せいしん)も身体(からだ)も健康(けんこう)に保(たも)つて生活(せいかつ)していくことができる。

イ 長い間(ながいあいだ)年中休(やす)まずに働(はたら)いてきてこの後(あと)も豊(ゆた)かにはなれそうもないけれども、それは自分(おれ)の境遇(きょうぐう)として受け入れて、自分の知恵(ちえ)や工夫(くわう)によつて生活(せいかつ)していくことができる。

ウ 長い間(ながいあいだ)一生懸命(いっせいけんめい)に働(はたら)いてきて世間(よかん)には認め(ら)れなかつたけれども、身体(からだ)を使う仕事(しごと)だけに季節(きせう)の変化(へんか)はよく知(し)っていて、自然(しぜん)にさらわらずに生活(せいかつ)していくことができる。

エ 一年(いちねん)中暇(ひま)なしで肉(にく)体(たい)労働(らうどう)をしてきたが、生まれついた環境(かんきやう)から世間(よかん)並(な)みの幸福(きふく)にはめぐまれなかつたにしても、世間(よかん)の変化(へんか)に合わせて身体(からだ)を守(まも)り生活(せいかつ)していくことができる。

問五

——線(5)「わが身の苦勞(くらう)が苦勞(くらう)にならねえ。」とありますが、「くめさん」がこのように考えた理由(りゆう)を、本文(ほんぶん)の表現(ひょうげん)を用(もち)いて三十字(さんじゅうじ)以内(い以内)で説明(せ明明)しなさい。

問六

——線(6)「節(ふし)をつけて、子供(こども)たちは洪作(こうさく)を呼(よ)んでいる。」とありますが、このように子供(こども)たちに慕(た)われる「洪作(こうさく)」の性格(せいかく)を示(し)している一文(いちぶん)を会話文(かいわぶん)以外(い以外)から抜き出(ぬ)し、最初(さいしょ)の五字(ごじ)を書(か)きなさい。

問七

——線(7)「打ち切る」とありますが、「切る」を用(もち)いた次の一～五の慣用句(かんようく)の意味(い)を、(意味)ア～オの中から一つずつ選び、記号(きごう)で答えなさい。

一 風(かぜ)を切る 二 口(くち)を切る 三 しらを切る
四 手(て)を切る 五 首(くび)を切る

(意味)
ア いきおいよく進む。 イ かかわりをやめる。
ウ つとめをやめさせる。 エ 知らないふりをする。
オ さいしよに言(い)います。

問八

本文(ほんぶん)の内容(ないよう)に合(あ)うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号(きごう)で答えなさい。

ア 「洪作(こうさく)」は、自分(おれ)を遊び仲間(あそびなか)と考える子供(こども)たちにも理解(りかい)を示(し)す人(ひと)であるが、一方(いっぽう)では苦勞(くらう)のうちに半生(はんせい)を送(おく)つた老人(らうじん)との話(はなし)の中で自分の性格(せいかく)を知ら(し)られる思(おも)いがした。しかし、老人(らうじん)の生き方(いきかた)が自分の運命(うんめい)を受け入(うけい)れることにあると言(い)われて少し共感(きんかん)がうすれた。

イ 「洪作(こうさく)」は、自分(おれ)を慕(た)う子供(こども)たちをしっかりとつける老人(らうじん)に驚(おど)くが、他人(たにん)とは違(ちが)つた考(かん)えを思(おも)つた通(と)りに遠慮(えんりょ)せず(に)語る(か)るので強い関心(かんしん)をいだく。その上(う)話(はなし)の内容(ないよう)が本質(ほんしつ)を突(つ)いて容易(りやく)に反論(はんろん)できないものであることを思(おも)い知ら(し)られて、自分(おれ)の未熟(みじく)さを反省(はんせい)した。

ウ 「洪作(こうさく)」は、自分(おれ)が子供(こども)たちから親(おや)しまれてる理由(りゆう)がのびのびした性格(せいかく)にあることを老人(らうじん)から教(おし)えられて納得(なっとく)した。それと共にこの老人(らうじん)のように生まれつき苦勞(くらう)をし続(つ)けて生きていく人(ひと)がいることを知(し)つて、人間(にんげん)の運命(うんめい)とは何(なに)かというよ(よ)うなことを感(かん)じた。

エ 「洪作(こうさく)」は、小学生(しょうがくせい)の子供(こども)たちにも慕(た)われる性格(せいかく)の人(ひと)であるが、墓(はか)参(ま)りの墓(はか)地(ぢ)で出(で)会(あ)つた老人(らうじん)からこれまで言(い)われたことのないことを言(い)われる。しかし、「洪作(こうさく)」は、自分(おれ)のことや身内(みうち)の人(ひと)までも遠慮(えんりょ)なく批評(ひひつ)するこの老人(らうじん)の話(はなし)に関心(かんしん)を持ち会話(かいわ)を楽(たの)しんだ。